令和4年度　福岡県ノーリフティングケア普及促進事業

モデル施設の概要
3期生新規モデル施設

3期生、半年間取り組んだ現状
令和4年12月末の現状調査の結果

福祉用具の変化は、赤字は令和4年12月までの変化を示す

施設名　筑豊地域	社会福祉法人　庄内福祉会 特別養護老人ホーム　はくりゅう園
入所定員	入所定員　50名　+　ショートステイ　10床
平均要介護度（12月末）	4.1
介護職員数（12月末）	24名　内訳　男性　9名、女性 15名　　平均年齢　46.9歳 介護職員以外の職員数　　23名　（看護職　7名　リハ職　3名　事務職　0名　その他　13名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：62台（うち電動ベッド62台，手動ベッド0台） 車いす合計　60台：標準型車いす（2台），跳ね上げ式車椅子（35台→**34台**）， リクライニング車いす（3台），　ティルト・リクライニング車いす（19台→**21台**） フレックスボード：0枚→**1枚** スライディングシート：0枚→**3枚** スライディングボード：0枚→**4枚** スライディンググローブ：0組→**2組** リフト、スタンディングリフト：0台
開始当初の職場環境	移乗時の介護負担を軽減するため平成27年に移乗ロボット「サスケ」を導入したが活用できなかった。その後介護度が高く身体の大きな利用者が増え、職員の身体に関わる介護負担が増してきており、65歳定年を超えて働く介護職員が増えており身体的負担軽減が課題となっていた。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	79%→74%　　（令和4年12月末　常に腰痛あり24%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている71%）

今年度からノーリフティングの取り組みをスタートした事業所です。コロナ禍で勤務状況も大変な中、全５回の研修で毎回施設長が中心となって、委員会メンバーも勤務状況を加味しつつ多くの方に参加していただきました。参加当初は、誰に何の用具を使うか決まっていない状況でしたが、体制を整えて、対象者のアセスメントを通してケアの方法を決定し、ノーリフティングケアがケアプラン内に記載され、統一したケアとなることを目指して取り組みを進めています。
用具の数や種類は揃っていなくても、ノーリフティングケアは行える、ということが発表を通して知っていただけると思います。

施設名 筑豊地域	社会福祉法人　ひまわり会 介護老人保健施設　ほ乃ぼの園
入所定員	定員　100名　+ショートステイ（空床利用）
平均要介護度（12月末）	2.25
介護職員数（12月末）	37名　内訳　男性　11名、女性　26名　平均年齢　41.1歳 介護職員以外の職員数　24名　（看護職　7名　リハ職　8名　事務職　4名　その他　5名）
取り組み開始時期	令和４年６月から
開始当初の福祉用具環境	ベッド：100台（うち電動ベッド15台，手動ベッド85台） 車いす合計　75台：標準型車いす（62台），跳ね上げ式車いす（4台）， リクライニング車いす（8台），　ティルト・リクライニング車いす（1台） スライディングシート：0枚⇒1枚 スライディングボード：2枚　フレックスボード含む⇒4枚 スライディンググローブ：0組⇒2組 リフト：0台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	スライディングボードはあったが、使用していなかった。 併設の特養ひまわり園が先にモデル施設となっていた為、体操等ごく一部の取組は行っていた。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	71%→57%　（令和4年12月末　常に腰痛あり19%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている68%）

参加当時は、用具の使用や管理の方法などは決定できておらず、抱え上げで介助が当たり前になっていました。
しかし現在は抱え上げ＝腰痛のリスクとして捉えて、事業所全体でのリスクマネジメント体制が整いつつあります。また、事業所単体ではなく、法人内で横展開することがノーリフティングの取り組みを普及するうえでの理想ですが、こちらは昨年度参加施設のひまわり園と同法人の施設で、今後も足並みを揃えつつ、法人内でノーリフティングの横展開のきっかけとなることが期待できます。

施設名 筑後地域	社会医療法人　天神会 こがラウンドケア大石町/こがデイサービス大石町・縄手　天神会（大石町縄手地区） 定期巡回随時対応型訪問介護看護・通所介護事業所等ノーリフティングケア推進チーム（こがラウンドケア大石町、こがデイサービス大石町、こがデイサービス縄手、こがケアアベニュー大石町、こがケアアベニュー縄手）
入所定員	定員　117名
平均要介護度（12月末）	2.6
介護職員数（12月末）	39　名　内訳　男性　10　名、女性　29　名　平均年齢　48歳 介護職員以外の職員数　10名　（看護職　4名　リハ職　4名　事務職　2名　その他　0名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：117台（うち電動ベッド117台，手動ベッド0台） 車いす合計　5台：標準型車いす（5・14台）⇒（6・10），跳ね上げ式車いす（19・14台）⇒（18・16），リクライニング車いす（1台），　ティルト・リクライニング車いす（4・1台）⇒（5・3台） スライディングシート：2枚⇒4枚 スライディングボード：6枚⇒11枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組⇒4組 リフト：0台　スタンディングリフト：なし⇒1台
開始当初の職場環境	車椅子を標準型から跳ね上げ式車いすに変更を行い始めていた。スライディングボードの導入も行っていたが、ボードを使用しない職員が多かった。移乗時やお風呂介助時に腰を痛める声が多数あり。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	68%→57%　（令和4年12月末　常に腰痛あり13%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている23%）

複合施設で離れた2事業所での取り組みとなりました。最初はどのようにしたらよいのか戸惑いながら手探りの状況が続きました。後半は、しっかりと足を地につけて行っていることを確認しながら落ち着いて行うことができました。

施設名 筑後地域	社会福祉法人　久英会 介護老人福祉施設　若久シニアビレッジ
入所定員	定員　150名
平均要介護度（12月末）	4.19
介護職員数（12月末）	49名　内訳　男性　16名、女性　33名　　平均年齢　43.2歳 介護職員以外の職員数　32名　（看護職　9名　リハ職　2名　事務職　15名　その他　6名）
取り組み開始時期	2022年　6月～
開始当初の福祉用具環境	ベッド：150台（うち電動ベッド　95台⇒150台，手動ベッド55台⇒0台） 車いす合計　144台：標準型車いす（43台⇒33台），跳ね上げ式車いす（43台⇒49台）， リクライニング車いす（65台⇒62台　ティルト・リクライニング車いす（0台） ・スライディングシート　：　5枚　・スライディンググローブ　：　10組 ・スライディングボード　：5枚⇒18枚　フレックスボード含む ・スマートスーツ　：　3セット　・スタンディングリフト（スマイル）：　1台 ・リフト　：　0台
開始当初の職場環境	ノーリフティングケアの必要性は理解しており、福祉用具各種（スタンディングリフト、移乗用ボード等）を取り入れていたものの、職員への教育が上手く出来ておらず浸透していない状況であった。
腰痛者の割合6月／11月 常に痛い・時々痛い人	69%→63%　（令和4年12月末　常に腰痛あり11%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている23%）

福祉用具が少ない中、どのように取り組んだらよいのかわからないままのスタートでした。
マネジメント研修や技術研修を行う中、完璧を目指そうとするあまりに疲弊しそうになりましたが結果、前に進むことができました。

施設名 筑後地域	社会福祉法人　八女福祉会 特別養護老人ホーム　八女の里
入所定員	定員　50名　+　ショートステイ　20床
平均要介護度（12月末）	3.8
介護職員数（12月末）	21名　内訳　男性　10名、女性　11名　　平均年齢　45.5歳 介護職員以外の職員数　18名　（看護職　5名　リハ職　2名　事務職　4名　その他　7名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：74台（うち電動ベッド44台，手動ベッド30台） 車いす合計　66台：標準型車いす（17台），跳ね上げ式車いす（43台）， リクライニング車いす（5台），　ティルト・リクライニング車いす（19台） スライディングシート：5枚 スライディングボード：7枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組 リフト：1台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	10年程前に抱えない介護を導入し、床走行式リフトやスライディングシート・スライディングボード等の福祉用具を活用してケアに当たっていたが、「時間がかかる、終わらない」といった理由から、いつの間にか福祉用具の使用頻度が減り、2名介助での低減策が主流となり抱え上げが日常化してしまい、腰痛を訴える職員が多くいる状況でした。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	64%→50%　（令和4年12月末　常に腰痛あり25%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げの介護を行っている35%）

管理者の理解と職員のやる気が程良く混ざり、施設の雰囲気が変化したことを実感できるほどになりました。1年目の取り組みとしては、でき過ぎの状況でした。

施設名 筑後地域	社会福祉法人　陽山会 特別養護老人ホーム　　ちくご船小屋
入所定員	定員　80名　+ショートスティ　　80床
平均要介護度（12月末）	3.6
介護職員数（12月末）	50名　内訳　男性　　16名、女性　　34名　　平均年齢　　52歳 介護職員以外の職員数　　10名　（看護職　4名　リハ職　0名　事務職　　4名　その他　　2名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：84台（うち電動ベッド80台，手動ベッド4台） 車いす合計　82台：標準型車いす（2台），跳ね上げ式車いす（70台）， リクライニング車いす（5台），　ティルト・リクライニング車いす（5台） スライディングシート：0枚 スライディングボード：1枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：10組 リフト：0台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	取組み開始以前は、ご利用者の皮下出血や職員の腰痛を発生させる「人力による介助」が主流であった。また、リフトやスライディンググローブ等福祉用具は存在するも使用されずにいた。もっとも多い年齢層の職員が皆、腰に痛みを感じながら業務をしている状況であった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	74%→74%　　（令和4年12月末　常に腰痛あり30%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている66%）

初期には一人の参加でとても心配な状況でしたが、マネジメント研修の回を重ねていくと、きちんと仲間ができ、話し合いながら計画立案に取り組めるまでになり、組織への変化が見られました。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　福岡ケアサービス 特別養護老人ホーム　初花
入所定員	定員　49名　+ショートスティ　　４　床
平均要介護度（12月末）	4.08
介護職員数（12月末）	28名　内訳　男性　９名、女性　　１９名　　平均年齢　　４３歳 介護職員以外の職員数　１３名　（看護職　４名　リハ職　１名　事務職　５名　その他　３名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：49台（うち電動ベッド49台，手動ベッド0台） 車いす合計　47台：標準型車いす（22台），跳ね上げ式車いす（9台）， リクライニング車いす（6台），　ティルト・リクライニング車いす（10台） スライディングシート：1枚 スライディングボード：1枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組 リフト：1台　スタンディングリフト：0台
開始当初の職場環境	福祉用具は存在していたが、ほとんど活用されていなかった。 ノーリフティングという概念すら存在していなかった。
腰痛者の割合6月／１１月 常に痛い・時々痛い人	71%→68%　　（令和4年12月末　常に腰痛あり23%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている41%）

研修開始当初は、マネジメント研修に大変苦しみ、計画を実行できない場面もありました。また、十分に実技研修に参加できない状況でしたが、研修を重ねるごとに「ノーリフティングケアの理解」も深まり、管理者も含め次年度から新体制で臨み、次年度のノーリフティングケアへの取り組みが楽しみな施設です。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　幸星会 特別養護老人ホーム　次郎丸の里
入所定員	定員　60名　+ショートスティ　6　床
平均要介護度（12月末）	3.76
介護職員数（12月末）	54　名　内訳　男性　21　名、　女性　32　名　　平均年齢　45.9　歳 介護職員以外の職員数　12　名　（看護職　5名　リハ職　1　名　事務職　2名　その他　4　名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：60台（うち電動ベッド60台，手動ベッド0台） 車いす合計　42台：標準型車いす（2台），跳ね上げ式車いす（31台）， リクライニング車いす（2台），　ティルト・リクライニング車いす（9台） スライディングシート：3枚 スライディングボード：3枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：15組 リフト：0台　スタンディングリフト：0台
開始当初の職場環境	福祉用具の種類、数の把握がされてなく、故障（ブレーキなど）も把握できていない状況、ボードがあるも使用されていなく、抱え上げにて介助を行っていました。統一したケアを目指していましたが、機能訓練計画書とケアプランの連動もサービス内容まで細かく記載されていない状況でした。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	52%→67%　（令和4年12月末　常に腰痛あり7%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている10%）

研修当初から、施設管理者が「ノーリフティングケア宣言」を施設内で行い、各担当の役割がしっかり機能しチームとして実行力のある施設です。その成果は、月ごとの発表にあらわれ、確実に施設内でノーリフティングケアが進んでいます。次年度は、ノーリフティングケアに対する取り組みがさらに飛躍すると思います。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　小石原福祉会 特別養護老人ホーム　能古清和園
入所定員	定員　80名　+ショートスティ　18床
平均要介護度（12月末）	3.4
介護職員数（12月末）	41名　内訳　男性　28名、女性　13名　　平均年齢　45.1歳 介護職員以外の職員数　24名　（看護職　5名　リハ職　1名　事務職　8名　その他　10名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：80台（うち電動ベッド80台，手動ベッド0台） 車いす合計　80台：標準型車いす（23台），跳ね上げ式車いす（37台）， リクライニング車いす（2台），　ティルト・リクライニング車いす（18台） スライディングシート：12枚⇒22枚 スライディングボード：10枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：10組 リフト：0台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	福祉用具の活用がほとんど出来ておらず、腰痛保持者への対応も十分とは言えない状況だった。トランスファーなどの技術的な指導も部署任せで、組織的な技術指導が出来ていなかった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	60%→58%　（令和4年12月末　常に腰痛あり19%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている25%）

チーム全体として、まとまりも良くマネジメント研修を重ねるごとに施設の体制作りと向き合いながら進めていいます。計画に対する実行力が低下した時期もありましたが、チームで決意を新たにすることで、取り組みも順調に進んでいます。一歩一歩確実に地盤を固めながら、進んでいる施設です。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　朝倉恵愛会 特別養護老人ホーム　宝珠の郷
入所定員	定員　50名　+ショートスティ　19床
平均要介護度（12月末）	4.16
介護職員数（12月末）	28名（内訳　男性　8名、女性　20名）　平均年齢　45.07歳 介護職員以外の職員数　14名（看護職　7名　リハ職　0名　事務職　5名　その他　2名）
取り組み開始時期	令和4年度6月より
開始当初の福祉用具環境	ベッド：71台（うち電動ベッド71台，手動ベッド0台） 車いす合計　59台：標準型車いす（34台），跳ね上げ式車いす（12台）， リクライニング車いす（11台），　ティルト・リクライニング車いす（2台） スライディングシート：4枚　⇒ 20枚 スライディングボード：8枚　⇒１3枚 フレックスボード含む スライディンググローブ：20組 ⇒　8組 リフト：1台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	ノーリフティングケアを推進していくため、数年前より、少しずつ福祉用具を購入し整備していた状況であったが、ルール決めや技術教育が確立しておらず、「どうやって定着させていくか分からない」という悩みがあった。また、慢性的な腰痛保持者が多く、一般的な予防策以外に何か良い手立てがないかという思いがあった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	89%→72%　（令和4年12月末　常に腰痛あり21%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている52%）

元々、職員の取り組みに対しての意識は深まっていた事業所ですが、何から始めたらいいかわからない状態で、取り組みが進んでいない状況でした。マネジメント研修を重ねるたびに、確実に目標における課題をクリアし、ノーリフティングの体制を構築してきました。コロナ禍でも、ノーリフティングの教育は少しずつでも着実に進めており、ケアの統一化を進められています。また、立てた計画を実施してみて、新たに業務効率化という課題が浮き彫りになり、その課題解決に向けて取り組んでいる最中の事業所です。

施設名	社会福祉法人　朝老園 特別養護老人ホーム　朝老園ひさみつ
入所定員	定員　30名　+　ショートスティ　10　床
平均要介護度（12月末）	3.9
介護職員数（12月末）	38名　内訳　男性　4名、女性　34名　平均年齢　55歳 介護職員以外の職員数　7名　（看護職　5名　リハ職　0名　事務職　0名　その他　2名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：40台（うち電動ベッド40台，手動ベッド0台） 車いす合計　37台：標準型車いす（23台），跳ね上げ式車いす（7台）， リクライニング車いす（5台），　ティルト・リクライニング車いす（2台） スライディングシート：12枚 スライディングボード：0枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組 リフト：0台　スタンディングリフト：１台
開始当初の職場環境	2017年に本体施設朝老園より分離移転した個室ユニット型の施設。本体施設が2011年に「抱えない介護」の取り組みを行い、その時中心で取り組んでいた職員数名が在籍していることから、スライディングシートの活用は十分に対応していた。一方、スタンディングリフト（手動）は開設当初よりあるものの、十分に活用できていない状況が続いていた。職員の平均年齢が55才と比較的高いことから、腰痛の訴えが多かった。加えて入居者の状態に適した福祉用具の整備が十分とは言えない状況であった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	72%→66%　（令和4年12月末　常に腰痛あり18%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている45%）

施設の都合でマネジメント研修には、施設長と教育担当二人の出席でしたが、施設長が積極的にかかわっておられ、二人の連携が取れており、計画立案と実施も着実に進んできました。ただ、負担が集中している状況がありましたので、今後は組織体制を強化しノーリフティングケアを推進していってください。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　つくも会 特別養護老人ホーム　　つくも苑
入所定員	定員　80名　（空床ショートステイ10名）
平均要介護度（12月末）	3.4
介護職員数（12月末）	22名　内訳　男性　4名、女性　18名　　平均年齢　　40歳 介護職員以外の職員数　14名　（看護職　7名　　リハ職　1名　　事務職　5名　　その他　1名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：電動ベッド80台（うちセンサーベッド24台） 車いす合計　53台：跳ね上げ式車いす（33台），リクライニング車いす（0台） ティルト・リクライニング車いす（20台） スライディングシート：30枚 スライディングボード：16枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：40組 リフト：7台　スタンディングリフト：１台
開始当初の職場環境	開設前より、ノーリフティングケアの視点で研修を行っており、開設後も福祉用具を使用した研修等を行ってきました。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	58%⇒58%　（令和4年12月末 常に腰痛あり30% 日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている3%）

新設の施設ですが、最初からノーリフティングケアを見据えて用具などをそろえられている先進的な施設で、マネジメント研修開始前からノーリフティングケアに取り組まれていました。そのため研修では今やっていることの意味付けと体制作りに取り組みました。
これからは定着のための人材育成に取り組んでいただければと思います。

施設名 北九州地域	社会福祉法人　清風会 特別養護老人ホーム　石並園
入所定員	定員　100名　+ショートスティ　　9　床
平均要介護度（12月末）	3.1
介護職員数（12月末）	42名　内訳　男性　4名、女性　38名　　平均年齢　55.6歳 介護職員以外の職員数　　名　（看護職　6名　リハ職　0名　事務職　2名　その他　20名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：112台（うち電動ベッド5台，手動ベッド102台）**電動ベッド　購入5，　レンタル　30，　手動72）** 車いす合計　88台：標準型車いす（70台），跳ね上げ式車いす（10台）， リクライニング車いす（5台），　ティルト・リクライニング車いす（3台） スライディングシート：0枚**⇒１** スライディングボード：0枚　フレックスボード含む**⇒４** スライディンググローブ：0組**⇒２** リフト：4　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	職員の高齢化も進んでおり、腰痛保持者が多い。当初より入浴時はリフト使用していたが、それ以外は抱え上げ介護をしている。電動ベッドも当初5台と少なく、福祉用具を使用できる環境も整っていなかった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	79%→74%　　（令和4年12月末　常に腰痛あり24%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている71%）

昭和４５年設立。施設としての歴史も古く、長い歴史で培われた、これまでのやり方が身についている中での委員会活動は難しい場面もたくさんありましたので、石並園のペースで進んでいければと考えていましたが、皆さんとても頑張られて、勉強会やチラシなどでスタッフの皆さんに啓発を続けられ、担当講師が思っていた以上にノーリフティングケアが進んできました。これはチームの皆さんが積極的に意見を出し合い、計画立案と実践をされてきたからだと思います。これからも焦らず、しかし止まらず進んでいってください。

令和4年度　福岡県ノーリフティングケア普及促進事業

メンター施設の概要
2期生モデル施設

2期生、2年間取り組んだ現状
令和4年12月末の現状調査の結果

福祉用具の変化は、（赤字は令和3年、青字は令和4年12月までの変化を示す）

施設名　筑豊地域	社会福祉法人　ひまわり会 特別養護老人ホーム　　ひまわり園　　（青字は、令和4年12月までの変化を示す）
入所定員	定員100名　+ショートスティ19床
平均要介護度（12月末）	3.8⇒3.9
介護職員数（12月末）	30名⇒34名　内訳　男性8名⇒9名、女性22名⇒25名　　平均年齢44.1歳⇒44.0歳 介護職員以外の職員数12名⇒25名（看護職4名⇒6名，リハ職0名⇒1名　事務職2名⇒6名　その他6名⇒12名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：105台（うち電動ベッド105台，手動ベッド0台） 車いす合計102台：標準型車いす（41台），跳ね上げ式車いす（33台）， リクライニング車いす（19台），　ティルト・リクライニング車いす（9台） スライディングシート：3枚 スライディングボード：7枚　フレックスボード含む⇒8 スライディンググローブ：5組⇒５組＋ディスポタイプ1箱（100枚入り） リフト：3台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	以前から、スライディングボードや電動ベッドはあったが適切に使用できていなかった。不良姿勢（腰を曲げる・ねじる）でケアをする職員が多く腰痛者の職員が多数いた。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	63%⇒62%　（令和3年12月末　常に腰痛あり24%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている66%）

ノーリフティングケアを定着していく上では、TOP管理者の理解、そして組織全体の取り組みとして職員に対しても同じ方向を向けることが、組織マネジメントにおける準備の段階で最も重要になります。今年度も全ての研修に施設長が参加され、委員会メンバーも全員で参加し、しっかりお互いが意見を言い合いながら、見直しが繰り返し行われてきました。その結果、昨年から取り組まれている腰痛予防の組織体制づくりにおける効果も表れてきています。

施設名 筑豊地域	社会福祉法人　佐与福祉会 地域密着型特別養護老人ホーム　ことぶきの森（青字は、令和4年12月までの変化を示す）
入所定員	定員29名　+ショートステイ10床
平均要介護度（12月末）	4.0
介護職員数（12月末）	22名⇒17名　　男性6名⇒7名、女性16名⇒10名　　平均年齢43歳 介護職員以外の職員数 12名⇒10名　（看護職4名　リハ職0名　事務職2名　その他6名⇒4名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：40台（うち電動ベッド40台，手動ベッド0台） 車いす：合計30台　標準型車いす（11台），跳ね上げ式車いす（1台）， リクライニング車いす（5台），　ティルト・リクライニング車いす（5台） スライディングシート：2枚 スライディングボード：1枚 スライディンググローブ：8組 リフト：2台　スタンディングリフト：0台
開始当初の職場環境	働いている職員に腰痛者が多く、また、福祉用具も床走行リフト1台と、その他の福祉用具が少しあり、それを上手に活用していなかった。リフトも特定の利用者にしか使用しておらず、抱え上げ介助が現状でした。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	79%⇒70%　（令和4年12月末　常に腰痛あり31%⇒23%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている24%⇒20%）

昨年度、研修スタート時は腰痛保持者が職員の8割を超えおり、抱え上げの介助が当たり前になっていた状況でしたが、２年目を迎えノーリフティングの体制を徐々に構築させ、腰痛保持者・抱え上げの件数も減少しています。コロナ禍で計画通りに進まなかった時もありましたが、少しずつでも歩みを止めずに取り組みを進めています。コロナ禍という状況はどこも同じ中で、是非発表を聞いて現場における取り組みのヒントが何か見つかるかもしれません。

施設名 筑豊地域	社会福祉法人　櫟会 特別養護老人ホーム　　くぬぎ苑　（青字は、令和4年12月までの変化を示す）
入所定員	定員70名　+ショートステイ20床
平均要介護度（12月末）	3.6
介護職員数（12月末）	54名　　男性17名、女性37名　　平均年齢38.9歳 介護職員以外の職員数　24名　（看護職8名　リハ職4名　事務職3名　その他9名）
取り組み開始時期	2017年4月から～（4年目）
開始当初の福祉用具環境	ベッド：90台（うち電動ベッド90台，手動ベッド0台） 車いす：合計33台　標準型車いす（15台），跳ね上げ式車いす（10台）， リクライニング車いす（0台），　ティルト・リクライニング車いす（8台） スライディングシート：11枚 スライディングボード：10枚 スライディンググローブ：11組 リフト：9台　スタンディングリフト：14台（ミニリフト125 9台/HUG 0台⇒5台）
開始当初の職場環境	2017年取組当初は、施設長自らが福祉用具プランナーの資格を取得し、それを機にノーリフティングケアへの取り組みをスタートした。当初は基本技術ありきで進めていたので，先ずは技術伝達、次にテストという流れで全職員に課題を与えていくという流れで取り組んでいました。
腰痛者の割合6月／12月常に痛い・時々痛い人	60%⇒59%　（令和4年12月末　常に腰痛あり12%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている9%）※今期は大きな入退職や異動があるが、腰痛が改善した割合が15%　悪化が16%となっている。

昨年度から施設内におけるノーリフティングの取り組みで最も重要となるリスクマネジメントについて職員の意識統一を始め、１年間で徐々に定着化が進んできています。その中で、職員がどのように自発的に取り組みに参加してもらうか、という課題に対して、委員会メンバーを中心に話し合いと見直しが繰り返されています。今年も引き続き職員を巻き込みつつ、委員会だけの活動ではなく職員全員での取り組みを目指しています。

施設名 筑後地域	社会福祉法人　弘恵会 介護老人保健施設　アルテンハイムヨコクラ　（青字は、令和4年12月までの変化を示す）
入所定員	定員95名　+ショートスティ5床
平均要介護度（12月末）	3.0
介護職員数（12月末）	31名　男性8名、女性23名　　平均年齢38.4歳 介護職員以外の職員数　26名　（看護職12名　リハ職4名　相談業務4名　事務職2名　その他4名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：106台（うち電動ベッ86台，手動ベッド20台） 車いす：合計70台　標準型車いす（43台），跳ね上げ式車いす（12台）， リクライニング車いす（15台），　ティルト・リクライニング車いす（0台） スライディングシート：17枚 スライディングボード：1枚 スライディンググローブ：11組 リフト：0台　スタンディングリフト：0台
開始当初の職場環境	コロナ禍で事業全般的に制限・自粛の状況で職員全体の活気定価、意思方向性の不統一化が見受けられた。また、介護職不足ということもあり、「なんで、この時期に！？（ノーリフティングケア）」の意見も聞かれた。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	55%⇒66%　（令和4年12月末　常に腰痛あり14%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている26%）

職員が少ない状況下で2年目のノーリフティングケアの取り組みとなりました。
歩みを止めず、マネジメント研修に参加して、計画立案に励み、コツコツと実行していきました。

施設名 筑後地域	社会福祉法人　光輪会 特別養護老人ホーム　　常照苑サンシャイン
入所定員	定員40名
平均要介護度（12月末）	3.5
介護職員数（12月末）	19名　　男性5名、女性14名　　平均年齢37.4歳 介護職員以外の職員数　10名　（看護職4名　リハ職0名　事務職4名　その他2名）
取り組み開始時期	令和３年度からのスタート
開始当初の福祉用具環境	ベッド：40台（うち電動ベッド40台，手動ベッド0台） 車いす：合計41台　標準型車いす（5台），跳ね上げ式車いす（31台）， リクライニング車いす（4台），　ティルト・リクライニング車いす（1台） スライディングシート：40枚 スライディングボード：7枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：22組 リフト：0台　スタンディングリフト：０台⇒1台
開始当初の職場環境	常照苑本部からの分離移転（新設）から4年目を迎えた施設です。設備は機能性を重視した設計で2階・3階が特養で2ユニットずつとなっています。比較的若い職員が多いが、軽度だか腰痛の訴えを耳にする状況がありました。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	50%⇒52%　（令和4年12月末　常に腰痛あり15%⇒15%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている10%⇒5%）

1年目は、施設長が中心となり実施していましたが、今年は介護職2人が中心となりノーリフティングケアに取り組みました。昨年度よりとても変化の大きな状態になっています。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　百友会 地域密着型　特別養護老人ホーム　フレンドピーチちはや （青字は、令和4年12月までの変化を示す）
入所定員	定員29名　　+ショートスティ7床
平均要介護度（12月末）	3.7
介護職員数（12月末）	26名　　男性11名、女性15名　　平均年齢　45.2歳 介護職員以外の職員数　11名　（看護職3名　リハ職1名　事務職5名　その他2名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：30台（うち電動ベッド30台，手動ベッド0台） 車いす：合計25台　標準型車いす（0台），跳ね上げ式車いす（21台）， リクライニング車いす（2台），　ティルト・リクライニング車いす（1台⇒2台） スライディングシート：1枚⇒4枚 スライディングボード：0枚⇒4枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組⇒9組 リフト：0台⇒1台　スタンディングリフト：0台
開始当初の職場環境	そもそも、ノーリフティングケアの概念がなかったため、スライディングボードやスライディングシートの活用ができていなかった。また。統一したケアを目指していたものの、具体的方法で手順が明確化されていなかったため、各々がバラバラのケアを行っていた。
現在の状況	毎月のノーリフティング委員会，毎月の研修は継続して実施できている。福祉用具の活用は定着してきているが「ケアの統一」が不十分な場面がある。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	50%⇒43% （令和3年12月末　常に腰痛あり17%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている17%）

開設4年目の施設であり、この2年間で組織とチームの成長は著しく、ノーリフティングケアに取り組むことで組織のケア体制の向上が大きく見られた施設です。これからの成長も期待でき将来が楽しみな施設です。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　恵徳会 特別養護老人ホーム　　なの国　　（青字は、令和4年12月までの変化を示す）
入所定員	定員80名　+ショートスティ20床
平均要介護度（12月末）	3.57⇒3.54
介護職員数（12月末）	44⇒50名　男性17⇒19名、女性27⇒31名　　平均年齢41⇒40.1歳 介護職員以外の職員数　19⇒18名　（看護職5名　リハ職1名　事務職3⇒2名　その他10名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：100台（うち電動ベッド100台，手動ベッド0台） 車いす：合計79台　標準型車いす（27台），跳ね上げ式車いす（33台）， リクライニング車いす（1台），　ティルト・リクライニング車いす（18台） スライディングシート：4枚⇒13枚 スライディングボード：6枚フレックスボード含む⇒13枚 スライディンググローブ：0組⇒2組 リフト：0台　スタンディングリフト：0台
開始当初の職場環境	福祉用具がある事を知らない。どんな福祉用具があるかを知らない、力任せの介助、介助技術を学ぶ機会が少ない。腰痛に対する取り組みが全くなかった。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	R3.6月70%⇒R3.12月77%→　R4.5月66%　⇒　R4.12月58% （令和3年12月末　常に腰痛あり23%　⇒R4.12月12% 日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている43%⇒R4.12月28%）

昨年度よりもノーリフティングケアの取り組みも進み体制も整ってきました。課題もしっかり見え組織の方向性も見えています。次年度は、多職種連携を図りながら、さらにノーリフティングケア体制を強固にしていき、これから明るい未来のある施設です。

施設名 福岡地域	特定非営利活動法人緩和ケア支援センターコミュニティ 看護小規模多機能居宅介護　三丁目の花や
入所定員	定員ショート7床　　現在の利用者17名　ショート利用4名
平均要介護度（12月末）	3
介護職員数（12月末）	１０名　男性４名、女性６名　　平均年齢46歳 介護職員以外の職員数　16名　（看護職8名　リハ職１名　事務職1名　その他6名）
取り組み開始時期	2021年4月から
開始当初の福祉用具環境	ベッド：7台（うち電動ベッド7台，手動ベッド0台） 車いす：合計3台　標準型車いす（0台），跳ね上げ式車いす（3台）， リクライニング車いす（0台），　ティルト・リクライニング車いす（0台） スライディングシート：2枚 スライディングボード：2枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：1組 リフト：0台 スタンディングリフト0台　リフト付きシャワーキャリー
開始当初の職場環境	福祉用具がなく、移動移乗の際に抱え上げる介助になってしまい、腰痛もちの職員が多数いた。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	92%⇒65%　（令和4年12月末　常に腰痛あり20%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている0%）

モデル施設で、唯一の看護小規模多機能居宅介護に事業所であり、昨年度よりも在宅に向けてのノーリフティングケアが進んでいます。これから、在宅支援でノーリフティングケアに取り組みたい事業所には一つの指標となる施設です。

施設名 北九州地域	社会福祉法人　広寿会 特別養護老人ホーム　　足原のぞみ苑
入所定員	定員80名　+ショートスティ20床
平均要介護度（12月末）	3.6
介護職員数（12月末）	33名　男性15名、女性18名　　平均年齢39.6歳 介護職員以外の職員数　16名　（看護職8名　リハ職1名　事務職3名　その他4名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：100台（うち電動ベッド100台，手動ベッド0台） 車いす：合計117台　標準型車いす（58台），跳ね上げ式車いす（31台）， リクライニング車いす（10台），　ティルト・リクライニング車いす（18台） スライディングシート：5枚 スライディングボード：10枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：5組 リフト：1台（入浴場）　スタンディングリフト：0台
開始当初の職場環境	福祉用具の定位置や、車いすの種類別に残数の把握ができていなかった。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	61%⇒51%　（令和3年12月末　常に腰痛あり　9%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている9%）

ノーリフティングケア取り組み後、腰痛体操を行う事は習慣化できました。福祉用具を使用する場面は多くなっていますが、正しい身体の使い方については、まだ課題もありました。また、福祉用具の正しい使い方にも課題があり、次年度は全職員への技術の浸透を目指し、組織体系を整えたり、マニュアルも見直して、これから、さらに成功させたいと頑張っています。

施設名 北九州地域	社会福祉法人　みやこ老人ホーム 特別養護老人ホーム　　みやこの苑　　（青字は、令和4年12月までの変化を示す）
入所定員	定員50名　+ショートステイ13名 ⇒　10名
平均要介護度（12月末）	4.4
介護職員数（12月末）	22名　男性10名、女性12名　　平均年齢37歳 介護職員以外の職員数　13名 （看護職6名　リハ職1名　事務職1名　その他5名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：65台⇒61台（うち電動ベッド53台⇒59台，手動ベッド12台⇒2台） 車いす：合計64台　標準型車いす（21台），跳ね上げ式車いす（18台）， リクライニング車いす（5台），　ティルト・リクライニング車いす（20台） スライディングシート：3枚⇒8枚 スライディングボード：8枚⇒12枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組⇒25組 リフト：0台　スタンディングリフト：0台⇒2台
開始当初の職場環境	電動ベッドや車いす、スライディングボード等の福祉用具は揃えつつあったが、使用方法の徹底が不十分で適切に福祉用具を活用できている人と、活用できていない人でばらつきがあった。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	74%⇒56%　（令和3年12月末　常に腰痛あり　0%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている　17%）

今回の事業で分かったこと。大きなムーブメントを生み出していくには、『フォロワー』が重要だという事でした。
　今、職場は大きく動き始めています。
チームワークこそが、成功の秘訣！
施設長、委員、職員みんなでやり遂げます！

施設名 北九州地域	医療法人　博愛会 介護老人保健施設　　博愛苑　　（青字は、令和4年12月までの変化を示す）
入所定員	定員100名
平均要介護度（12月末）	2.61
介護職員数（12月末）	28名　男性13名、女性15名　　平均年齢39歳 介護職員以外の職員数　40名　（看護職10名　リハ職7名　事務職12名　その他10名）
取り組み開始時期	2020年4月～（2年目）
開始当初の福祉用具環境	ベッド：100台（うち電動ベッド100台，手動ベッド0台） 車いす：合計79台　標準型車いす（47台），跳ね上げ式車いす（17台⇒22台）， リクライニング車いす（9台），　ティルト・リクライニング車いす（0台⇒1台） スライディングシート：3枚 スライディングボード：4枚⇒7枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：多数 リフト：1台　スタンディングリフト：0台
開始当初の職場環境	ノーリフティングの取り組みを開始していたが、福祉用具の使用までは出来ていなかった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	89%⇒56%　（令和4年12月末　常に腰痛あり　11%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている　19%）

以前から少しずつノーリフティングケアには取り組んでいましたが、今年度から本格的に取り組みスタート。抱え上げない介護技術習得者も2名います。ようやく、福祉用具を活用しての移乗介助やベッドの高さ調節が当たり前になってきました。

令和4年度　福岡県ノーリフティングケア普及促進事業

アドバイザー施設の概要
1期生モデル施設

3年間取り組んだ現状
令和4年12月末の現状調査の結果

福祉用具の変化は、赤字は令和3年、青字は令和4年12月までの変化を示す

施設名　筑豊地域	ベストライフケア株式会社 介護複合施設ひばり
入所定員	通所介護(定員49名)　住宅型有料老人ホーム(43床)
平均要介護度（12月末）	2.45⇒2.40
介護職員数（12月末）	21名⇒22名　（男性9名、女性12名⇒13名）　平均年齢　47.45⇒47.1 介護職員以外の職員数　9名⇒8名（看護職　7名⇒4名　リハ職　0名⇒3名　事務職　1名⇒0名 その他　1名）
取り組み開始時期	令和2年8月～
開始当初の福祉用具環境の変化 赤字は福祉用具の変化	ベッド：45台（電動ベッド38台⇒39台、手動ベッド7台⇒6台　） 車いす：標準型車いす（3台）⇒1台，跳ね上げ式車いす（26台）⇒28台， リクライニング車いす（2台）⇒1台，ティルト・リクライニング車いす（2台）⇒3台 スライディングシート：4枚⇒4枚 スライディングボード：3枚⇒3枚 スライディンググローブ：19組⇒19組　※（福祉用具は令和3年から増減なし） リフト：１台⇒3台　スタンディングリフト：１台⇒3台
開始当初の職場環境	必要に応じて体に負担がかかる業務は改善するように努める体制ができているつもりであったが、「全職員に対して...」という面で十分ではなかった
現在の状況	・アセスメントし、対象者を特定したリフト、スタンディングリフト使用を全職員が行っている ・緊急の場合を除いては、抱え上げの場面はほとんどみられなくなっている。腰痛アンケートでも「抱え上げの場面はほとんどない、またはない」と応えた職員が約9割になっている
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	59%⇒70%（職員の入れ替わり等もあり増えている様であるが、「常に痛い」が0人など効果あり （令和4年12月末　常に腰痛あり10%⇒0% 日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っていない。

３年目の先輩施設として、施設内でリスクマネジメントができる体制を構築し、現在ではノーリフティングケアが当たり前のケアとして定着しています。またモデル施設の役割として同法人の障害者施設へのノーリフティングケアの導入や、ネットワークを活かし、高齢者・障害・児童で の幅広い視点で地域に向けた情報発信を続けられています。
地域連絡協議会でも先輩施設として後輩施設へアドバイスいただきました。

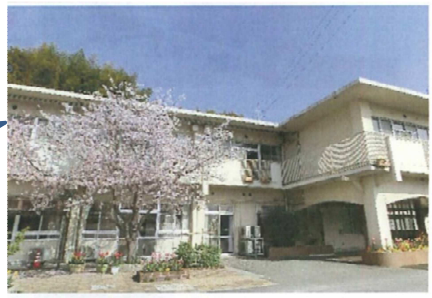
ベストグループ周辺施設状況

施設名 筑豊地域	社会福祉法人 内野会 特別養護老人ホーム　本陣園
入所定員	50名　+ショートステイ10名
平均要介護度（12月末）	3.88
介護職員数（12月末）	37名⇒35名　（男性9名、女性28名⇒26名）　平均年齢　45.4歳⇒46.3歳 介護職員以外の職員数　19名⇒20名（看護職　4名　リハ職1名　事務職　5名　その他　9名⇒10名
取り組み開始時期	令和2年8月～
開始当初の福祉用具環境 赤字は福祉用具の変化	電動ベッド：60台 手動ベッド0台 車いす：標準型車いす（30台⇒8台），跳ね上げ式車いす（10台⇒22台）， リクライニング車いす（13台⇒4台），ティルト・リクライニング車いす（8台⇒13台⇒14台） スライディングシート：4枚⇒6枚 スライディングボード：4枚⇒11枚 スライディンググローブ：14組⇒11組＋ディスポ⇒35組＋ディスポ リフト：2台 スタンディングリフト：0台⇒3台
開始当初の職場環境	一人での抱え上げは実施しておらず、２人介助で低減策はとれていたが、腰痛者がでている状態であった。教育体制について課題もあり、腰痛予防のための身体の使い方から周知をしていく必要があった
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	60%⇒54%　（令和3年12月末　常に腰痛あり8%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている3%）

自施設のノーリフティングケアの充実もすすんでいる本陣園は、地域連絡協議会でも先輩施設としていろいろなアドバイスをしていただきました。また地域へ向けても、福祉用具情報の共有などしていただいています。地域連絡協議会でも中心施設の一つです。

施設名 筑後地域	社会福祉法人　光輪会 特別養護老人ホーム　常照苑　くすのき通り
入所定員	入所定員：30名
平均要介護度（12月末）	3.5
介護職員数（12月末）	18名⇒22名　男性　6名、女性12名⇒17名　平均年齢　42.8歳⇒39.5歳 介護職員以外の職員数　15名　（看護職　5名　事務職　2　名　その他　8　名）
取り組み開始時期	令和2年8月～
開始当初の福祉用具環境の変化 赤字は福祉用具の変化	ベッド：30台⇒30台（電動ベッド30台，手動ベッド0台） 車いす：標準型（0台），跳ね上げ式車いす（16台） リクライニング車いす（7台），ティルト・リクライニング車いす（0台） スライディングシート：16枚⇒20枚⇒24枚 スライディングボード：　4枚⇒5枚⇒6枚 スライディンググローブ：0枚⇒2組⇒24組 スタンディングリフト　：0台⇒１台　リフト：0台⇒１台
開始当初の職場環境	福祉用具はそろっているが使い方が周知されておらず、抱え上げ介助が主流となっていたその為職員の腰痛者も発生していた
現在の状況	・業務開始前の全職員の腰痛予防体操のルーティン化のより現在も常に腰痛ありの職員はゼロ ・一人一人がノーリフティングケアに対しての意識が向上し、個別アセスメントを行う中で一つのツールとして自然に組み込まれ実践へとつながっている。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	%⇒　%　（令和4年12月末　常に腰痛あり0%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている　0%）

今年度は地域の先輩施設として活躍していただきました。年度最初の地域連絡協議会では、集合施設として新しいモデル施設へノーリフティングケアの紹介や施設見学を受け入れていただき、筑後地域の施設の連帯ができました。地域へは地域団体への働きかけや行政への働きかけなど、陰になり日向になり、筑後地域を盛り上げていただいています。



施設名 筑後地域	社会福祉法人　桜園 特別養護老人ホーム　桜の丘
入所定員	入所定員：50名　　+ショートステイ20床
平均要介護度（12月末）	4.01⇒4.0⇒3.98
介護職員数（12月末）	18名　男性　5名、女性　17名　（産休・育休3名含む）　　平均年齢　43歳 介護職員以外の職員数　20名　（看護職　5名　リハ職　0名　事務職　4名　その他　8名）
取り組み開始時期	令和2年8月～
開始当初の福祉用具環境の変化 赤字は福祉用具の変化	ベッド：70台（電動ベッド35台，手動ベッド35台） 車いす：標準型（3台），跳ね上げ式車いす（39台）， リクライニング車いす（4台），ティルト・リクライニング車いす（0台） スライディングシート：11枚⇒27枚⇒32枚　　スライディングボード：　9枚⇒12枚 スライディンググローブ：2組⇒4組　　スタンディングリフト　：0台⇒1台　リフト：2台
開始当初の職場環境	平成26年度より抱え上げない介護行うために移乗介助時に電動ベッドの活用や移動用リフター、トランスファーボード、スライディングシートの活用を進めています。ベッド上での介護時や移乗時にも電動ベッドギャッジアップ機能を活用し職員のケアのしやすい高さにベッドの高さを上げたりご利用者の起こし上げを行っています。
現在の状況	ノーリフティングケア＝介護技術ではなく体の使い方、不良姿勢とならないように、また、しっかりと体重移動がケアの中で活用できるように毎日の体操の中で習慣付け、意識付けを行っている。技術だけではなく腰痛のリスクマネージメントについても気づきを挙げ安全で安心して働ける環境つくりとして工夫を行っている。福祉用具も必要なものが使いやすい配置状態となりノーリフティングケアを実践しやすい環境を整えている。ノーリフティングケアを実践する中でご利用者の変化にもみられている。(筋緊張があり座位姿勢が整わなかったご利用者が座位が整うようになり自分で食事を食べることができなくなっていた状態から自分でスプーンを持ち茶碗を持ち食事を食べようとされるようになった。)ケアプランの中にノーリフティングケアが組み込まれ実践に繋がっている。PDCAサイクルが回りだしている。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	21%⇒28%　（令和3年12月末　常に腰痛あり　11%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている　0%）

今年度は、地域連絡協議会のリーダー施設として、後輩施設へアドバイスや地域の会議の取りまとめなどで地域を引っ張っていただきました。また地域の教育機関への広報なども率先して活動していただき、他のモデル施設のよきお手本になっていただきました。

施設名 福岡地域	社会医療法人　福西会 さわら老健センター
入所定員	入所定員：100名
平均要介護度（12月末）	2.78
介護職員数（12月末）	42名　男性15名、女性27名　　平均年齢　41.34歳 介護職員以外の職員数　41名　（看護職11名　リハ職9名　事務職4名　その他　17名）
取り組み開始時期	令和2年8月～
開始当初の福祉用具環境の変化	ベッド：100台（電動ベッド58台，手動ベッド42台）⇒電動ベッド68台、手動ベッド32台 車いす：標準型車いす（23台），跳ね上げ式車いす（43台）⇒46台 リクライニング車いす（0台），ティルト・リクライニング車いす（13台） フルリクライニング車椅子：3台 スライディングシート：　0枚⇒6枚 スライディングボード：　１枚⇒8枚 スライディンググローブ：0組⇒60組　リフト：0台⇒1台⇒0台 浴室リフト：1台
開始当初の職場環境	入浴支援、排泄支援、移乗支援などで中腰姿勢により腰痛の発生要因がある。 また、職員間の意識や技術の差がある
現在の状況	福祉用具がある程度揃ったが排泄、入浴介助時の不良姿勢などあり課題として残っている。 特に入浴時の浴槽への出入り介助時の負担が大きい状況。リフト導入を検討中。 また技術指導についてコア・サポートメンバー以外の職員への指導、新人中途採用者への指導が遅れている。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	40%⇒74%　（令和3年12月末　常に腰痛あり 21%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている　50%）

今年度は、先輩モデル施設として地域連絡協議会で、後輩施設へのアドバイスなどをいただきました。また地域への広報にも努めていただきました。
また同法人内の他施設へもノーリフティングケアの取り組みを広げています。これからも先輩施設として活躍していただきたいと思います。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　二丈福祉会 ・特別養護老人ホーム　仙寿苑　・地域密着型特別養護老人ホーム　はまぼう
入所定員	特別養護老人ホーム　仙寿苑（従来型）　入所定員：50名 地域密着型特別養護老人ホーム　はまぼう ユニット型　入所定員：29名
平均要介護度（12月末）	仙寿苑　4.0　　はまぼう　4.0
介護職員数（12月末）	34名　男性　9名、女性　25名　　平均年齢　48.2歳 介護職員以外の職員数　34名　（看護職　7名　リハ職　4名　事務職　2名　その他　22名）
取り組み開始時期	令和2年8月～
開始当初の福祉用具環境 2施設合計 赤字は福祉用具の変化	ベッド：79台（電動） 車いす：標準型車いす（33台），跳ね上げ式車いす（18台） リクライニング車いす（12台），ティルト・リクライニング車いす（8台） スライディングシート：　5枚 スライディングボード：　8枚 スライディンググローブ：40組 リフト：3台
開始当初の職場環境	入浴支援、排泄支援、移乗支援などに腰痛の発生要因がある。
現在の状況	利用者のみならず介護職員の平均年齢も高くなるなか、『特別養護老人ホーム仙寿苑』『特別養護老人ホームはまぼう』共に、スライディングボードやシート、リフトの使用頻度は向上し日常介護に浸透できている。今後は、教育プログラムが確立され、ノーリフティングケアがやって当たり前の介護技術となるよう、活動を続けていきたい。
腰痛者の割合月6／12月常に痛い・時々痛い人	67%⇒73%　（常に腰痛あり30.2%⇒14.7%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている9.8⇒8.8%）

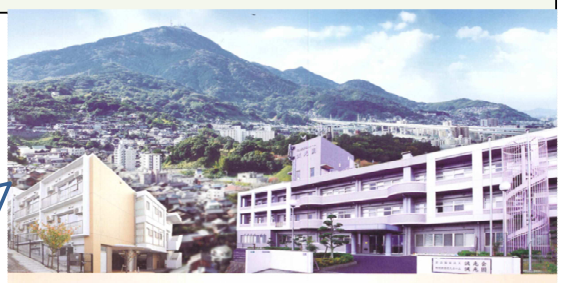
仙寿苑・はまぼうという２つの施設にノーリフティングケアの取り組みを実施されてくる中で、２施設間の取り組みの差が出てきており、今年度は、遅れている施設への取り組みをされてきました。
またマネジメント研修では、補助講師として新規モデル施設へのアドバイスをいただいたり、地域連絡協議会でもリーダーとして活躍いただきました。これからも先輩施設として後輩施設を指導していただきたいと思います。

施設名 北九州地域	社会福祉法人　薫風会 特別養護老人ホーム　風の家
入所定員	入所定員：150名 ユニット型　（16ユニット）
平均要介護度（12月末）	3.54
介護職員数（12月末）	79名　男性17名、女性　62名　　平均年齢　43.3歳 介護職員以外の職員数32名　（看護職７名　リハ職２名　事務職　3名　その他20名）
取り組み開始時期	令和2年8月～
開始当初の福祉用具環境の変化。 赤字は福祉用具の変化	ベッド：電動ベッド　150台 車いす：標準型車いす（61台）⇒（50台）、跳ね上げ式車いす（46台） リクライニング車いす（11台），ティルト・リクライニング車いす（7台） スライディングシート：4枚⇒18枚　スライディングボード：8枚⇒18枚 スライディンググローブ：1組⇒86組 スタンディングリフト：0台⇒9台　リフト：0台⇒8台
開始当初の職場環境	ノーリフティングケアに取り組むのは初めての状況で、福祉用具・リフトなどの導入もこれからであった。
現在の状況	課題としては取り組みを継続する。今年度より技術向上の為、実技試験を開始しました。また福祉用具を使用する際のヒヤリハット事例を集め利用者様・スタッフ共に安全に生活・ケアが出来るよう取り組んでいます。地域連絡協議会にも参加し施設での悩みや、ノーリフティングケアを広げていく取り組みについても地域の仲間と頑張っています。
腰痛者の割合5月／12月常に痛い・時々痛い人	69%⇒67%　（令和3年12月末　常に腰痛あり16%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている　5%）

大規模施設としてノーリフティングケアに取り組まれ、大規模施設のノーリフティングケアの取り組みの先輩モデル施設として、地域連絡協議会で発信していただきています。
今年度は先行モデル施設として地域連絡協議会にて一番最初に施設見学を受け入れていただいたり、地域へノーリフティングケアの活動を発信していただくなど活動していただきました。これからもノーリフティングケアの地域連絡協議会で活躍していただければと思います。

施設名 北九州地域	社会福祉法人　誠光会 特別養護老人ホーム　誠光園
入所定員	60名
平均要介護度（12月末）	3.7
介護職員数（12月末）	28名　男性　10名、女性　18名　　平均年齢　37.0歳 介護職員以外の職員数　17名　（看護職　6名　リハ職1名　事務職　3名　その他　7名）
取り組み開始時期	平成31年より取り組み開始　（3年目）
開始当初の福祉用具環境 赤字は福祉用具の変化	ベッド：電動ベッド　60台 車いす：モジュール型　70台，ティルト・リクライニング型　29台 スライディングシート　：30枚 スライディングボード　：11枚　（フレックスボード含む）⇒　22枚 スライディンググローブ：30組 スタンディングリフト　：3台　⇒　6台（レンタル1台含む） リフト：3台　⇒　2台（レンタル利用、対象者退居し1台返却） 浴室脱衣所に櫓型リフト　その他、情報共有・ケア管理ソフト導入・活用中
開始当初の職場環境	必要な福祉用具は整っているが、中腰姿勢でのケアなどによる腰痛が減少していない、また介助中に発生したと思われる利用者のケガや内出血が起こっていた。
現在の状況	・腰痛保有者に個人面談実施し、私生活よりも介護業務時に腰痛発生、特に夜勤業務の疲労に伴い腰痛発生していることが面談結果で判明。 ・ベッド上にケアに課題があるといえるため、対応策を委員会内で検討中。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	41%⇒39%　（令和3年12月末　常に腰痛あり4%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている 0%）

今年度本来は３年目でマネジメント研修は卒業でしたが、施設の皆さんの強い希望でマネジメント研修に参加されました。常に課題を見つめ、よりノーリフティングケアを進めるために日々取り組まれているところは素晴らしいと思います。
また、マネジメント研修の補助講師や地域連絡協議会で施設のノーリフティングケアの取り組みを発表は他のモデル施設のお手本になっています。



令和4年度　福岡県ノーリフティングケア普及促進事業

アドバイザー施設の概要
1期生　先行モデル施設

3年間取り組んだ現状
令和4年12月末の現状調査の結果

福祉用具の変化は、赤字は令和3年、青字は令和4年12月までの変化を示す

施設名 筑豊地域	社会福祉法人　桂川福祉会 特別養護老人ホーム　明日香園　（赤字は令和3年、青字は、令和4年12月までの変化を示す）
入所定員	定員　入所50名　　ショートステイ20名
平均要介護度（12月末）	4.2
介護職員数（12月末）	25名　男性　11名⇒10名、女性14名⇒13名　　平均年齢　42歳⇒43歳 介護職員以外の職員数　10名⇒11名　（看護職4名　リハ職1名　事務職０名　その他5名⇒6名）
取り組み開始時期	平成30年12月～（3年目）
開始当初の福祉用具環境の変化 赤字は福祉用具の変化	ベッド：68台⇒69台（うち電動ベッド30台⇒40台⇒52台，手動ベッド38台⇒28台⇒17台） 車いす：標準型車いす（12台）⇒9台，跳ね上げ式車いす（19台）⇒23台， リクライニング車いす（7台）⇒8台，ティルト・リクライニング車いす（9台⇒12台⇒7台） スライディングシート：15枚⇒15枚 スライディングボード：ロング2枚、ショート6枚 スライディンググローブ：11組 リフト：3台⇒4台　スタンディングリフト：１台⇒2台
開始当初の職場環境	職場内での勉強会を定期的に行い、ノーリフティングに対する情報を適宜共有しており、福祉用具の使用に関しては定着できていたが、使用時の不良姿勢や、その他介助時の環境調整などが不十分なことがあった。
現在の状況	毎月のノーリフティングケアプロジェクト会議は継続して実施しており、定期的に会議で情報の発信をしている。用具の使用も変化はなく、不良姿勢などの姿勢管理は以前に比べ良くはなっているが、まだ不充分な場面がある。 技術チェックに関しては、合格ラインを設定し毎月取り組んでいる。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	50%⇒64%　（令和3年12月末　常に腰痛あり　8%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている０　%）

今年度も、地域連絡協議会のリーダー施設として、協議会を取りまとめ、けん引。後輩施設のノーリフティングケアの取組みでの困り事や疑問点など、自施設の取組みや悩み事などもオープンにして、後輩施設の参考と励みになっています。
これからも地域連絡協議会のリーダーとして、まとめていただきたいと思います。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　那珂川福祉会 特別養護老人ホーム　ねむのき
入所定員	入所定員：50名　+ショートステイ10床
平均要介護度（12月末）	4.2
介護職員数（12月末）	23名　男性　8名、女性15名　　平均年齢　36.8.　歳 介護職員以外の職員数9　名　（看護職　4名　リハ職1名　事務職　2名　その他　2名）
取り組み開始時期	平成30年9月～　（3年目）
開始当初の福祉用具環境 赤字は福祉用具の変化	ベッド：61台（電動） 車いす：標準型（16台）⇒13台、跳ね上げ式車いす（15台）⇒16台、リクライニング車いす（1台） ティルト・リクライニング車いす（13台）⇒17台 スライディングシート：16枚 スライディングボード：5枚 スライディンググローブ：15組⇒17組 床走行式リフト：5台、浴室用リフト:1台　スタンディングリフト2台）⇒3台
開始当初の職場環境	県事業以前から、ノーリフティングケアを行い、就業前の体操、安定感のある靴の着用、福利用具（リフト・ボード・シート等）の活用など行っていたが、入浴時、おむつ交換時等の不良姿勢、トイレ誘導時の介護などの課題が残っている状態。
現在の状況	環境改善としてトイレの空間を広くし、ベストポジションバーを設置。浴室用リフト購入し、入浴時の抱え上げ介護の軽減を図っている。 入所者の機能レベルとしてリフト移乗者よりボード移乗者や立位介助移乗者が増え、トイレ誘導者者が増えており、依然としてトイレ誘導時の介護などの課題が残っている状態。 スタンディングリフト（ミニリフト125）購入により、一部改善見られる。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	43%⇒50%　（令和4年12月末　常に腰痛あり　8.6%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている　0%）

平成３０年より「従来型入所」がノーリフティングケアを導入。昨年度から地域連絡協議会のリーダー施設として福岡地域の施設の質問や困りごとに答えたり、取りまとめに尽力し、活躍していただきました。これからも地域のリーダーとして活躍していっていただきたいと思います。

施設名 北九州地域	社会福祉法人　ひさの里 特別養護老人ホームふじの木園
入所定員	70名（ユニット型：8ユニット）
平均要介護度（12月末）	3.68
介護職員数（12月末）	44名　男性　16　名、女性　28名　　平均年齢　50歳 介護職員以外の職員数　15名　（看護職　6名　リハ職　2名　事務職6　名　その他　1　名）
取り組み開始時期	平成28年年7月ごろ（7年目）
開始当初の福祉用具環境の変化 赤字は福祉用具の変化	ベッド：電動ベッド 89台⇒90台⇒92台 車いす：標準型車いす　35台，モジュール型車いす　20台， リクライニング型 3台⇒1台，ティルト・リクライニング型27台⇒28台 スライディングボード　：　7枚⇒9枚 スライディングシート　：45枚（ケアスタッフ一人に1枚） スライディンググローブ：45組（ケアスタッフ一人に1枚） スタンディングリフト　：　7台⇒11台　床走行リフト：17台⇒18台（うち、浴室リフト10台）
開始当初の職場環境	ノーリフティングケア取り組み開始後腰痛は激減し新規の腰痛の発生はない。 現在必要な福祉用具は配置しており、職員のノーリフティングケア教育が定期的になされている。 また個別アセスメントとプランニング、その定期的な見直しも行なっている。
現在の状況	ノーリフティングケアに関する組織体制（リスク管理、健康管理、教育管理、福祉用具管理、個別ケア管理）は整ってきている。それに伴い、ケア提供者の腰痛の軽減や入居者様の二次障害の減少にも繋がっている。また、取り組みを継続して行うことで、新たな課題も見つかり、新たな福祉用具の導入を図ったり、ICT、IoTを積極的に活用することによりスタッフのケアに対する意識や知識の向上・共有も促進されている。
腰痛者の割合5月／12月 常に痛い・時々痛い人	31%⇒23%　（令和4年12月末　常に腰痛あり　0%　日常業務の中でほとんどが持ち上げや抱え上げ介護を行っている　0%）

ふじの木園は約８年前からノーリフティングケアに取り組まれノーリフティングケアの体制が整っており、他の施設にノーリフティングケアを導入する目標となっています。また須藤施設長には、ことある毎に他のモデル施設にアドバイスをいただいたり、合同連絡会ではコロナ下でのノーリフティングケアの効果についてお話いただいきました。これからもノーリフティングケアの牽引役を担っていっていただきたいと思います。